

「悲の器」 尾畑文正(『ひだご坊』2004年5月掲載)

井伏鱒二の小説「山椒魚」のラストは大きく育ちすぎて洞穴からでることができなくなった山椒魚が「嗚呼！」と深い溜息をつくところで終わっています。大きくなりすぎた山椒魚の寓意はなんと今日の時代社会を反映していることでしょうか。文字通り、出口なしです。

アフガニスタン、イラクに出兵したアメリカの存在、さらには、それに追従する日本の姿は、あまりにも肥大化してしまって、自由に身動きとれない山椒魚に似ていませんか。軍隊を送り込めば送り込むほど反感をかい、テロを誘発する。自分で自分の首を絞めているようなものです。これを悲劇といわないで何を悲劇というのでしょうか。

いまから30年、40年前は、高度経済成長の流れのなかで、お金さえもうかれれば、あとは野となれ山となれとでもいうような考え方が幅を利かしていた時代でした。当時は、アメリカのように経済的に豊になることが人間の幸せだという価値観にだれもが酔いしれていました。その結果、水俣病、イタイタイ病、四日市喘息に象徴される経済的発展の歪み、ひずみが、あちらこちらで起き上がって、それこそ人間であることが奪われることとなったのです。

そのころに私は、高橋和己の『悲の器』を読み、その小説の冒頭に引用されていた源信の「我は悲の器なり、我に於いて何ぞ御慈悲ましまさずやと」(『往生要集』)という言葉に出会いました。そこで初めて、人間を「悲の器」と捉える見方に、なぜか魅了されてしまいました。それは当時、悪としての体制社会に「異議申し立て」をすることに、社会正義を感じてはいたものの、それだけにとどまらない世界を求めていたからだと思います。

この「悲の器」という言葉には、善と悪、正義と邪義、聖と俗、是と非という二項対立的な人間観ではなく、矛盾に満ちた、泥沼のような人間認識の中から、人間は悲としてしかありえない存在だと見出してくるものがあったように思います。それは「私」という存在が、無量無数のいのちを踏みにじって、その犠牲の上に存在しているという深い深い現実です。実はそういう存在認識を私に教えてくれたのがベトナム戦争でした。日本の経済的繁栄を支えたのは、他でもない、アジアの人々の血と汗と涙の結果だったのです。

最近でも、サザンオールスターズの桑田佳祐さんは『平和の琉歌』の中で、「この国が平和だと誰が決めたの、ひとの涙も渴かぬうちに」と、日本本土の平和の繁栄が沖の人達の命と暮らしを犠牲にしたところに成り立っていることをはっきりと歌いあげています。つまり、源信が言った「悲の器」とは、人間存在の構造そのものが、「悲」としての存在なのだということなのです。私が生きるということは、他のいのちを食いつぶして生きているということです。しかも、それは、力のあるものが力のないものを支配し、差別し、抑圧する形で現われているところに、単なる精神論では解決できない問題がはらまれています。

この言葉に出遇って30数年たちました。出口なしの時代状況はますます深まるばかりです。その中で、あらためて、「我は悲の器なり」と言い切って、ともすれば、逃げ出したくなる現実に耐えて、「悲の器」としての自分を見つめ続けることの大切さを思います。

<略歴>

(おばた ぶんしょう)

1947年生まれ。

現在、三重教区泉称寺住職。同朋大学教授。

著書に『親鸞を生きるということ』(樹心社)『靖国神社をどう考えるか』(共著・小学館文庫)など多数。